

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K11496

研究課題名(和文) 体育の教員養成課程における学習者の運動観察能力の養成に関する理論的・実証的研究

研究課題名(英文) Theoretical and Empirical Study on the Development of Learners' Motor Perception Abilities in Physical Education Teacher Training Programs

研究代表者

鈴木 理 (SUZUKI, Osamu)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：90245647

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、保健体育科教員養成段階の学習者(大学生)を標的とし、学習指導要領の運動領域の内容として示された運動の観察能力形成プログラムを開発することであったが、過去数年間に亘るCOVID-19の感染拡大に鑑み、限定的な条件下で目的に向けた研究知見を集積し、次のような成果に至った。すなわち、ゴール型ゲームにおける「ボールを持たないときの動き」の動感意識を分析することを主眼とした実技実習であれば、実習担当者の動感分析経験に加えて、本研究で適用された方法(課題となる運動の構造分析及び当該分析のための資料収集と借問)を用いて学習者の動感意識を探ることに焦点化した質問を行うことが可能となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保健体育科教員を志望する学生は、運動の外形を表面的に眺めることが多いために、動きの評価に際しては視覚的に捉えうる内容しか探し出すことができない。運動の観察能力は、学習を通して形成される個人能力であり、そのためのトレーニングは計画的に行われる必要がある。しかしながら、観察能力の内的構造は開示されながらも、その育成に関する報告は一部のスポーツ運動に留まっており、学習指導要領の内容には十分に手が及んでいない。本研究知見は、これまでに検討されていない運動を対象とし、新規かつ精密な方法を適用して導出されたものであり、今後の教員養成プログラムの改善に大きな貢献を果たすものと期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop a program to cultivate observational skills in physical activities, as outlined in the physical education curriculum, targeting learners (university students) in the stage of becoming health and physical education teachers. However, considering the spread of COVID-19 over the past few years, we have gathered research findings under limited conditions, achieving the following results. Specifically, in practical exercises focused on analyzing the kinesthetic awareness of "movements without the ball" in goal-oriented games, it became possible to ask questions that explore learners' kinesthetic awareness using the methods applied in this study (structural analysis of the task-related movements and collection and borrowing of relevant materials), in addition to the practical instructor's experience in kinesthetic analysis.

研究分野：スポーツ教育学, 体育科教育学

キーワード：運動観察能力 創発身体知

## 1 . 研究開始当初の背景

### (1) 体育教師の観察能力の重要性

運動指導者の専門家には「学習者の運動に何を見抜けるか」という能力の形成が欠かせない (マイネル, 1981) . それゆえ, 保健体育科教員免許状取得を望む学生の教育課程において, 運動観察に関する問題圏は重要な位置を占める . アメリカ体育・スポーツ協会 (NASPE, 1992) は, 教職課程における質的運動分析の必修化に関するガイドラインを作成し, 運動技能や運動を組織的に分析するのに不可欠な知識並びに, 現場において運動者とその運動を評価するために知識を活用できる経験, を標準的内容として求めている . このように運動観察の重要性は, 運動指導における「運動経過の評価」の必要性に端を発している . これに関連して佐藤 (2014) は, 運動経過の評価に関して, 運動の「外部視点と内部視点」並びに「量的評価と質的評価」の対比から運動観察における問題性を論じ, 子どもの運動発達査定に係る現象学的な動感思考分析の重要性を指摘している . これらの運動観察に関わる議論は, 保健体育科教師に高い専門性を具備することを要請するとともに, その養成段階が抱えている課題も顕在化させている .

### (2) 運動の共感的観察

マイネルは運動の観察について「運動の自己観察」と「運動の他者観察」の識別を示している . 前者は「自己の意識体験を自ら観察すること」であり, 後者は「運動を観察者の向こう側に置かれた客観的対象として観察すること」である . 人は眼前に展開する現象のすべてを観ることはできず, さらに運動は一瞬ごとに過去のものとして消えていくため, そこでは過去に獲得された運動経験と運動知識に基づいて特定の情報が選択的に受容される . さらに, 運動の他者観察においては, あたかも学習者と動いているかのように運動経過に自己を没入させ, その自己観察を通じて他者の運動を自らの運動として感じとる共感的な観察が求められている (佐藤, 2006) . これらの先行研究から, 体育教師に求められる運動の他者観察においては, 情報の選択的受容能力並びに運動共感能力の形成が必須であることが明らかになっている .

### (3) 課題と現状

NASPE が示した運動の質的運動分析の必要性は, 現場の経験的・主観的な運動分析・評価を再評価する重要な指摘である . だが, 学習者の多くは運動の外形を表面的に眺めることが多いために, 動きの評価に際しては視覚的に捉えうる内容しか探し出すことができない . ここで, 前述のごとく, 運動の観察能力は, 学習を通して形成される個人能力である (朝岡, 1999) ことを踏まえると, そのためのトレーニングは計画的に行われる必要がある . しかしながら, 観察能力の内的構造 (佐藤, 2018) は開示されながらも, その育成に関する報告は器械運動, 陸上競技, 球技のボール操作等ごく一部に留まっており, 学習指導要領に記載された内容には十分に手が及んでいないのが現状である . これが改善されなければ, 今後も外形を捉える視座から脱却することは困難であり, 個人の自得を待つしか策がなくなる . ここに運動観察能力の形成プログラムを開発する必要がある .

以上(1)~(3)の問題認識から導かれた本研究の「問い」は下記のものであった .

【問1】運動観察能力はどのような過程 (位相) で形成されていくのか? : 理論整理

【問2】「運動観察能力の形成」とは何が「できる」ことなのか (種目・運動の経験の違いにより, 他者観察の成果が異なるため): 批判的検討

【問3】上記について保健体育教師養成課程の講座においてはどのような教育的介入を施せばよいのか? : 指導方略の提案

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、前項に示した「問い」に答えることである。具体的には、「保健体育科教育養成段階の学習者を標的とする(学習指導要領に記載された)運動の観察能力形成プログラムの開発について、理論的・実証的に検討すること」である。

この目的達成に向けて、下記3点を課題として設定した。

【課題1】運動観察に関する理論をレビューすることで、運動観察能力に関する諸研究や方法論をめぐる諸問題を整理する：理論研究

【課題2】学習指導要領に記載されている内容の運動観察能力形成プログラムを考案し、授業実践からの問題を踏まえて実証的に検討する：実証研究

【課題3】問1・2を踏まえて運動観察能力開発プログラムを提示する。

## 3. 研究の方法

まず、運動観察能力に関する諸研究や方法論をめぐる諸問題を運動学、バイオメカニクス、体育科教育学などの分野に跨り考察する。その際、対象となる運動の技術の構造分析に加えて、2021年度に実施予定の授業実践は同年に行いプログラムの実証研究に向けた準備を進める。

上記をもとに、学習指導要領に記載されている内容に即して運動観察能力形成に向けたプログラム(現在値査定・観察観点提示後の現在値査定・多様な運動経過観察)の授業実践に取り組み、実証的に成果と課題を検討する。その際、学習者の運動観察能力形成に向けた学習を支える学習カード等を作成し、読み取った内容を構造的に記録できるようにする。

以上の学習過程と成果および課題を踏まえ、対象となる技術内容に即した運動観察能力育成プログラムを開発する。その際、学習カードについて精査し、教材が付与されたプログラムを提示する。

## 4. 研究成果

過去数年間に亘る COVID-19 の感染拡大により、本研究を計画通りに遂行することは困難を極めたが、着手可能な部分から所期の目的に向けた研究知見を集積してきた。その成果は、雑誌論文8篇、学会報告12篇として公表されるに至っている。その概要は下記のようなものである。

マイネル(1998, pp.38-39)が述べているように、教師やコーチなど、指導者に不可欠の運動観察力を習得させるためには、体系的な観察トレーニングの方法が考えられなければならない。しかし、そのマイネルも具体的な観察トレーニングの内容については言及していない。このことに関連して、パウマン(1986, S.7)はスポーツ行為の多様性と観察力に影響する要因の多様性から生じるトレーニング方法開発の困難性について指摘し、観察力トレーニングの体系化に関する研究の必要性を指摘している。また、ヴォルターズ(1999, S.123)の研究では、事前に技術的なポイントを説明し、観察させたところ、全体経過の運動リズムや運動調和といった動きの全体性を観察することができなくなったことを指摘し、この種の観察トレーニングの問題点について言及している。このように「観察ポイントの伝達」といった観察トレーニングの当然の前提でさえも、検討の余地は大いに残されている。加えて佐藤(2018, pp.41-59)は、教職(保健体育)志望者を対象とした実証的研究の成果から、観察力のトレーニングでは、「模範例の提示」や「観察ポイントの伝達」よりも観察内容の「単純化」が重要であり、しかも運動経過の外的事象の類似性から運動質を理解するのではなく、「よい動き」に現れる類似した「感じ」を「型」として認識し、それを「なぞらえる」ことを通じて理解することが前提となることを指摘している。

さらに、マイネルの形態学的分析の真意を汲み、現象学に基礎を置くことで当該分析を深化させた金子(2009, p.106)によれば、他者観察とは、身体移入原理に裏づけられた「自我身体の動感志向性を投射しながら、他者の動感世界に潜入していく形態学特有の観察法」であるという。なお、ここで取り上げられる動感とは、金子(2005, p.24)の言うところの「私の身体性のなかに息づいている 動いている感じ」を指し示している。そして、この他者観察能力は、運動の外的経過を丹念に眺めるだけで形成されることはない。すなわち、他者の動感形態の把握は、指導者が「自らの動感の発生様態を分析できる動感自己観察の能力を基盤にしてはじめて可能になる」(朝岡, 2019, p.122)のである。

したがって、「運動観察能力の形成」には運動の自己観察が「できる」ことが求められる。本研究が立脚する発生運動学における自己観察とは、「私の身体が動くときに今この動感志向性を超越論的に現象学する自己から観察する」(金子, 2009, p.105)ことである。これを実現するためには、「自己の意識体験に属していないものをすべて遮断することによって意識体験に内在する純粹意識の領野を取り出そうとする」(朝岡, 2019, p.123)現象学的運動分析が必要となる。現象学において「分析とは、複雑に絡まりあっている諸契機を取り出し、他のものから区別し、同定すること」(木田ほか編, 2014, p.270)である。そのため、当該分析においては「構造分析(静態分析)」と「発生分析」の方法が用いられる。前者の分析が実現できるのも、「分析は同時に構成を前提し、かつ意味している」(木田ほか編, 2014, p.270)ためである。したがって、構造分析では「特定の習熟段階で、いくつかの構成部分に分節化された全体として形づくられた運動感覚意識」(朝岡, 2014, p.113)、すなわち、「動感図式」の成り立ちを明らかにすることが目的となる。運動ができるようになると、「われわれの運動実行の全体は、意識的なコントロールをともなわずに自律的に遂行される機能上のまとまり(機能単位)によって分節化されていて、その機能単位は『こんな感じ』という簡略化された実行指令を与えるだけで順番に実行されていく」(朝岡, 2019, p.88)。この「運動投企」(メルロ=ポンティ, 1964, p.191)と呼ばれる「実行指令」を構成しているのは、身体図式を組み換え、更新することで獲得された習慣である。この動感図式の構造を明らかにするために、構造分析では「具体的個別の認識から自由変更を通して『～とは何か』という普遍的な本質を見出すこと(本質直観)」(朝岡, 2019, p.124)が目指される。つまり、「自由変更を通して多様なパリエーションの全体を把握することによって、自らが行っている動きかた(動感図式)と他の動きかたの関係を規定している価値判断の基準を浮き彫りにする」(朝岡, 2019, p.124)ことが可能となる。

上述のとおり、本研究では、他者観察において「今ここ」の指導対象者の動感を把握・評価することが求められながらも、そのための価値判断の拠点となる指導者自身の自己観察に関する研究蓄積の必要性が浮き彫りとなった。ちなみに、金子(2005, pp.68-71)は指導者養成課程における実技実習を以下の3つの階層に区別している。

- (1) 第一段階: 新しい動感運動を形態統覚化位相(一応できるという確信をもてる段階)のレベルで身体化に至る体験実習。
- (2) 自らの動感発生様態を厳密に分析できる(動感自己観察)能力を高める実習。
- (3) 他者の動感形成様態の分析(動感他者観察)を通じて形成位相の査定能力を身につける実習。

このようなことをふまえて、(1)の運動体験を運動経験化できる段階まで取り組み、そのうえで 一体化したプログラムを作成することが必要と考えられる。

ここで、本研究グループではすでに、(1)に関わる研究に着手(伊佐野ほか, 2018)している。その上で、本研究は、保健体育教師養成課程に所属する学習者を対象に、(2)の「自らの動感発生様態を厳密に分析することができる(動感自己観察)能力を高める」ことを目的とする実技実習を計

画した。なお、授業実践に先立って先行研究を概観したところ、学校体育においてカリキュラムの大半を占める球技を対象にした(2)の実践的研究は未着手であった。さらに、球技のゲームパフォーマンスの向上に重要な意義を持つ「ボールを持たないときの動き」(高橋, 1997, p. )についても同様の状況であった。

これらの背景を踏まえ、本研究は実技実習(サッカー)を履修する学習者を対象に、「ボールを持たないときの動き」の機能単位の抽出を意図した分析用紙を用いて、構造分析に向けた事例収集に向けて自らの動感志向性の働きを観察する機会を設けた実技実習を実施した(伊佐野ほか, 2024)。本研究の目的達成に向けて、当該の動きが形態統覚化位相(できる)に達しているとの判断から考察対象者として選出された対象者1名(A)に対して借問を実施し、機能単位の抽出及び構造分析を実施した。構造分析を通じて、Aの「ボールを持たないときの動き」が、(1)空間、相手、味方の位置と状態を「見る」、(2)相手、味方との距離に応じた空間に「立ち位置を取る」、(3)次の状況に対応した態勢で「構える」という3つの機能単位を含む類化形態がまとめられた。そして、Aの動感図式には類化形態に6つの類型化形態が確認された。さらに、切迫性の高低の中でも異なる動感志向性によって区別された。こうして本質直観の手続きを取ることで、類化と種化のバリエーションが抽出され、Aの「ボールを持たないときの動き」の動感図式の呈示に至った。さらに、「ボールを持たないときの動き」の動感図式のシンボル化の確認のために、消去法を取り入れた上で、借問を実施したことで、ボールを持たない味方の位置取りに対する意識やピッチ上のここを感じ取る意識、意識が向けられてはいないが感じ取られているボールを持たない味方を捉えているという機能単位(1)から(3)の背後で受動的に働く動感が明らかになった。

このような手続きを踏まえて呈示されたAの「ボールを持たないときの動き」の動感図式は、個人的意識から導き出されたものであるため、普遍的妥当性は主張できない。しかしながら、この度の方法(構造分析及び当該分析のための資料・借問)で個人の動感を明らかにすることによって、学習者の動感を評価する際の基礎とすることが可能となる。

さらに、保健体育教師養成課程における実技実習において、本研究が手がけた実践における成果は次のように活用される。指導現場において運動実施者の動きを把握・評価する場合、指導者には金子(2009, p.106)の示す身体移入原理に裏づけられた「自我身体の動感志向性を投射しながら、他者の動感世界に潜入していく」ことが求められる。しかしながら、佐藤(2018, p.243)は、運動の実施者の動く感じをとらえようとする活動、すなわちキネステーズ理解は、「理解される側(学習者)は同一でも、指導者の理解に応じて、とらえられる内容はどうにでも変わりうる」ことを指摘している。それゆえ、佐藤(2018, p.243)は、運動実施者の動く感じを指導者が一方的に理解しないよう、指導者に対し、運動を行うときの実施感覚を能動的に意識化することを求めている。この意図的な動感意識化作業として、佐藤(2017)は動感消去(動感解体)法と焦点化質問法を示しているが、本研究知見はこれらの実践に大きな貢献を果たすものである。例えば、焦点化質問法は、指導者が学習者に対して意識させたい動きの部分に焦点を当て、今行った動きの評価や前回との違いを意図的に、誘導的に質問することによって技術的に重要な部分に関心を持たせることを企図している。このことから、ゴール型ゲームにおける「ボールを持たないときの動き」の動感意識を分析することを主眼とした実技実習であれば、実習担当者の動感分析経験と本研究の成果を活用し、学習者の動感意識を探ることに焦点化した質問が実践可能となる。

以上、本研究は厳しい制約条件の下、運動の観察能力の形成に関してこれまで十分に手が及んでいなかった領域における知見を一定程度集積することができた。未着手に留まった研究課題については今後継続して追究していく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計27件（うち査読付論文 25件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 19件）

1. 著者名 菊池翔太・関慶太郎・青山清英	4. 巻 8
2. 論文標題 スポーツ教育における適切な運動強度の決定に関する一考察ー水鳥とびにおける主観的努力度の変動性の違いに着目してー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教師教育と実践知	6. 最初と最後の頁 31-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菊池翔太・関慶太郎・井川純一・越澤 亮・伊佐野龍司・青山清英	4. 巻 3
2. 論文標題 大学と中学校の授業連携からみた投運動の観察評価の可能性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大学地域連携学研究	6. 最初と最後の頁 65-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菊池翔太・富永翔太・関慶太郎・青山清英	4. 巻 22
2. 論文標題 観察的動作評価法による円盤投動作の評価に関する研究	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本陸上競技学会誌	6. 最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊佐野龍司・坂本修司・大嶽真人	4. 巻 37
2. 論文標題 ゴール型ボールゲームにおける「ボールを持たないときの動き」の動感図式の呈示に関する実践的研究：サッカーを題材にして	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 コーチング学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井川純一・伊佐野龍司・安住文子・重城哲	4. 巻 3
2. 論文標題 大学の野外教育におけるキャンプ場の施設設備の現状と地域連携のあり方について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大学地域連携学研究	6. 最初と最後の頁 71-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菊池翔太・関慶太郎・井川純一・越澤亮・伊佐野龍司・青山清英	4. 巻 3
2. 論文標題 大学と中学校の授業連携からみた投運動の観察評価の可能性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大学地域連携学研究	6. 最初と最後の頁 65-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大嶽真人・橋口泰一・伊佐野龍司	4. 巻 3
2. 論文標題 学校・地域・大学との連携におけるスポーツクラブ運営の課題と可能性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大学地域連携学研究	6. 最初と最後の頁 12-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木理	4. 巻 26
2. 論文標題 学習指導要領「ネット型」に例示されたバレーボールの認識論的検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 バレーボール研究	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山崎紀春・大嶽真人・榑英彦・鈴木理・高橋正則・長澤純一・松本恵・水落文夫・水上博司・伊佐野龍司・吉田明子・加藤夏海	4. 巻 104
2. 論文標題 COVID-19禍における大学体育実技が与える効果：2021年度日本大学文理学部の受講生を対象として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 199-218
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木理・土田了輔	4. 巻 44-2
2. 論文標題 ゲームの指導内容開発のための考察視座	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育・スポーツ哲学研究	6. 最初と最後の頁 101-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.9772/jpspe.44.2_10	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木理	4. 巻 36-1
2. 論文標題 学校体育に求められるコーチング学的視座	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 コーチング学研究	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24776/jcoaching.36.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高信清人・松原拓矢・伊佐野龍司・関慶太郎・小針幸世・青山清英	4. 巻 2
2. 論文標題 大学との連携によって実施した中学校体育授業に関する事例の研究：投能力向上のための学習プログラムについて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大学地域連携学研究	6. 最初と最後の頁 373-380
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 Seki K., Nagano T., Aoyama K., and Morioka Y.	4. 巻 86
2. 論文標題 Squat and countermovement vertical jump dynamics using knee dominant or hip dominant strategies	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Human Kinetics	6. 最初と最後の頁 63-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5114/jhk/159285	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菊池翔太・関慶太郎・榎英彦・青山清英	4. 巻 129
2. 論文標題 円盤投におけるサークルの大きさが投動作に与える影響	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 陸上競技研究	6. 最初と最後の頁 24-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 青山清英・青山亜紀	4. 巻 36-1
2. 論文標題 測定スポーツの分類に関する一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 コーチング学研究	6. 最初と最後の頁 15-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24776/jcoaching.36.1_15	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林法爾実・大嶽真人・坂本宗司・伊佐野龍司	4. 巻 7
2. 論文標題 視覚障がい者に対する全身振動刺激トレーニングがステップ動作に及ぼす影響に関する事例的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教師教育と実践知	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井川純一・高信清人・三木圭太・水島宏一・野口智博・小山貴之・金野潤・城間修平・伊佐野龍司・関慶太郎・川井良介・青山清英	4. 巻 2
2. 論文標題 ローラースキー・トレーニングにおける主観的努力度が客観的出力に与える影響	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アプライドスポーツサイエンス	6. 最初と最後の頁 E1-E10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊佐野龍司	4. 巻 70-8
2. 論文標題 「なぜ、保健の学びに他者が必要なのか」問い直す	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Osamu Suzuki	4. 巻 2020-4
2. 論文標題 Research trend and perspective of teaching ball games in school education in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Theory and Methods of Physical Education and Sports	6. 最初と最後の頁 67-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 伊佐野龍司・阿部滉	4. 巻 1
2. 論文標題 保健体育教師の養成・育成を企図した実践から捉える大学との連携の意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学地域連携学研究	6. 最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 土田了輔・伊佐野龍司	4. 巻 6
2. 論文標題 役割分担を内在する機能共同体的な文化の学習に関する考察 状況論とゲーム構造論に基づく教科的合理的配慮	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教師教育と実践知	6. 最初と最後の頁 13-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 本道慎吾・青山清英他3名	4. 巻 128
2. 論文標題 落下高が同水準であるリバウンドジャンプとドロップジャンプの下肢バイオメカニクス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 陸上競技研究	6. 最初と最後の頁 24-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高信清人・関慶太郎・青山清英	4. 巻 128
2. 論文標題 ハードル走におけるインターバル疾走中の支持脚各部の動作と機能に関するバイオメカニクスの研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 陸上競技研究	6. 最初と最後の頁 14-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木理	4. 巻 69
2. 論文標題 いま, 陸上運動 [ 競技 ] で何を教えるべきか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 城間修平・伊佐野龍司	4. 巻 5
2. 論文標題 バスケットボールのファストブレイクにおける創発身体知の形成過程	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教師教育と実践知	6. 最初と最後の頁 17-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ryoji Isano	4. 巻 3
2. 論文標題 A study on physical education curriculum and its issues in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Theory and Methods of Physical Education and Sports	6. 最初と最後の頁 3-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 関慶太郎・長野友紀・三木圭太・青山清英	4. 巻 29
2. 論文標題 スプリントハードルにおけるインターバル走とスプリント走の比較：支持脚各部の発生運動量に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 スプリント研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計26件(うち招待講演 2件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 本道慎吾・澤野大地・青山清英
2. 発表標題 東京都世田谷区における大学地域連携の現状
3. 学会等名 大学地域連携学会第3回学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 本道慎吾・伊佐野龍司・青山清英
2. 発表標題 体育・スポーツ専攻学生の学習・履修状況調査からみる高等教育機関における学びの実態について - バイオメカニクス科目履修者を対象として -
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 青山清英・青山亜紀
2. 発表標題 コーチング学の教育の質保証に関する一考察 - 心理学・教育学分野との比較から -
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 青山亜紀・青山清英
2. 発表標題 東欧圏におけるスポーツ科学の歴史的展開についての研究 - アスリートの準備における一般理論を中心に -
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 青山亜紀・青山清英
2. 発表標題 近年の「コーチング学」における研究の方向性を巡る諸問題
3. 学会等名 日本コーチング学会第35回学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kikuchi, S., Seki, K., Ae, K., and Aoyama, K.
2. 発表標題 Effect of the incline board on discus throwing motion
3. 学会等名 XXIX Congress of Internatinal/Japanese Society of Biomechanics
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 菊池翔太・関慶太郎・井川純一・伊佐野龍司・青山清英
2. 発表標題 大学と中学校との授業連携に関する事例報告ー観察的動作評価法による投能力向上に向けた学習プログラムの検証ー
3. 学会等名 大学地域連携学会第3回学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 菊池翔太・関慶太郎・阿江数通・青山清英
2. 発表標題 傾斜台が円盤投の動作に与える影響ースタンディングスローに着目してー
3. 学会等名 日本陸上競技学会第22回学会大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 橋口泰一・大嶽真人・伊佐野龍司
2. 発表標題 パラスポーツコーチのコーチング理念の開示に向けた探索的研究-日本のトップパラスポーツコーチを対象にして-
3. 学会等名 日本コーチング学会第35回学会大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 伊佐野龍司・関慶太郎・土屋弥生・青山清英
2. 発表標題 小学校と大学のスポーツ教育連携事業に関する事例的研究：公立小学校サマースクールにおけるパルシューレ実践を事例として
3. 学会等名 大学地域連携学会第3回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安住文子・重城哲・井川純一・伊佐野龍司
2. 発表標題 キャンプ場の施設設備の現状と大学の野外実習における地域連携のあり方について
3. 学会等名 大学地域連携学会第3回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木理・黒木恋・伊佐野龍司
2. 発表標題 体育授業者による当事者研究の可能性
3. 学会等名 日本体育科教育学会第28回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 黒木恋・伊佐野龍司・鈴木理
2. 発表標題 新任体育教師の成長過程に関する実証的研究
3. 学会等名 日本体育科教育学会第27回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 黒木恋・伊佐野龍司・鈴木理
2. 発表標題 新任体育教師の成長を支える同僚性の構造
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第42回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高信清人・松原拓矢・伊佐野龍司・関慶太郎・小針幸世・青山清英
2. 発表標題 大学と学校における体育授業の連携に関する一考察 中学生の投能力向上のための授業を対象として
3. 学会等名 大学地域連携学会第2回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Takanobu, K., Seki, K., and Aoyama, K.
2. 発表標題 Effectiveness of a learning program to improve throwing techniques for junior high school students
3. 学会等名 22nd International Symposium : Evidence-Based Practices for Elite Sport (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青山清英・青山亜紀
2. 発表標題 コーチング学における教育の質保証に関する学問論的課題
3. 学会等名 日本コーチング学会第34回大会
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 菊池翔太・富永翔太・関慶太郎・青山清英
2. 発表標題 観察的動作評価法を用いた記録向上に伴う円盤投動作の評価に関する実践報告
3. 学会等名 日本コーチング学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 青山清英・井川純一・伊佐野龍司・関慶太郎
2. 発表標題 地域スポーツ指導者養成にこれからの大学課程教育で求められることは何か：日本大学文理学部体育学科の場合
3. 学会等名 大学地域連携学会第2回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木理
2. 発表標題 ネット型ゲームにおける教材の典型性
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第41回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青山清英
2. 発表標題 大学におけるスポーツ指導者養成教育と地域スポーツ指導者の質保証
3. 学会等名 大学地域連携学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青山亜紀・青山清英
2. 発表標題 「トレーニング・ピリオダイゼーション」理論の歴史的展開と今後の課題
3. 学会等名 日本コーチング学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青山清英・青山亜紀
2. 発表標題 測定スポーツの分類
3. 学会等名 日本コーチング学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青山清英
2. 発表標題 一般コーチング学の構築に向けて
3. 学会等名 日本コーチング学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊佐野龍司
2. 発表標題 通常学級に在籍する特別な配慮を必要とする生徒に通じる体育教師の実践的知識：高等学校体育授業における一事例を対象にして
3. 学会等名 桜門体育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木理
2. 発表標題 「学びの道筋」の創造に向けて：道標（みちしるべ）の探索
3. 学会等名 新潟市小学校教育研究協議会体育部（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊佐野 龍司 (ISANO Ryoji) (00734112)	日本大学・文理学部・准教授  (32665)	
研究分担者	青山 清英 (AOYAMA Kiyohide) (20297758)	日本大学・文理学部・教授  (32665)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------